

昔から今へと続くまちづくり

ようしょく はじ

1 うなぎの養殖の始まり

(1) うなぎの町、吉田町

下にある写真は、吉田町を空から写したものです。四角い池のようなものがあるのがわかりますか。これらはすべてうなぎを育てるための養鰻池なのです。吉田町がうなぎで有名なことはみなさんも知っていますね。

昔の養鰻池



現在はビニールハウスで行われています

どのようにして、吉田町でうなぎの養殖がさかんになったのかな。



(2) 久保田恭によるうなぎ養殖の始まり

吉田町は大井川のすぐ横にあり、水にめぐまれた町です。しかし、江戸時代から明治時代のころは、大井川の洪水で大きな被害に何度もあっていました。特に、川尻の田んぼはあれはてていました。

大正時代になると、洪水で流されてきた土がたまり、大井川の水が田畑の下を流れるようになってしまいました。冷たい水が田んぼの下からわき出て、稲がうまく育ちません。稲が病気になることもよくありました。農家の人たちは、田んぼをあきらめて工場に働きに出るほどでした。

「このままでは川尻がほろびてしまう。」と心配したのが、川尻の久保田家に養子となった「恭」でした。恭は、「川尻を救う方法は何かないものだろうか。」と考え続けました。わき出る冷たい水と洪水でたまってしまったやせた土が原因であることはわかりましたが、いい方法が見つかりませんでした。



久保田 恭

1886年(明治19年) 浜名郡天王村で生まれる
1914年(大正3年) 久保田家のむこ養子になる
1946年(昭和21年) 吉田村長となる
1957年(昭和32年) 71歳で亡くなる

ところがある日、^{はま な ぐん} 浜名郡の^{じつ か} 実家に帰ったときに、^{はま な} 浜名湖の^{こ まわ} 周りでは^{ほう ふ} 豊富な^{り よう} 水を利用したうなぎの養殖が行われていることに気がつきました。

「もしかしたら、川尻の水でうなぎを育てることができるかもしれないぞ。」友人の^{ます だ しん きち} 増田真吉にも^{きょうりよく} 協力してもらい、川尻でうなぎの養殖を行ってみることにしました。



恭は、しらすうなぎの^と 取り方、えさのやり方など養殖の^{べん} 勉強を^{きょう} 熱心にして、大正11年にうなぎの養殖を^{ほん かく てき} 本格的に始めました。「うなぎなんかを^か 飼ってもだめだよ。3年と^{つづ} 続きはしないよ。」とかげ口も^{けっ か} たたかれましたが、^{せい こう} 結果は思いのほか成功でした。

はじめはかげ口を言っていた人々も、その^{よう す} 様子を見てうなぎの養殖を始めました。大正14年には吉田の^{よう まん いけ} 養鰻池は^{とう} 東京ドーム7つ分ほどの^{か く ち} 広さになり、^{しゅつ か} 各地に出荷できるようになりました。

しかし、それぞれの家がばらばらに出荷したり、えさを買ったりしていたので、十分にもうけが出ませんでした。そこで、^{く み あい} 恭は^{そん じん} 組合をつくり、もっと^{は い ばら ぎょ でん ぐ み あい} 村民がもうけられるようにしようと考えました。こうしてつくられたのが^{は い ばら ぎょ でん ぐ み あい} 榛原魚田組合です。

戦争^{せん そう}では、養鰻池は水田^かに変えられてしまいましたが、戦争^おが終わると、恭はふたたびうなぎの養殖を始め、吉田のうなぎ^{ふっかつ}の復活^{そそ}に力を注ぎました。



ぎよぎょうきょうどうくみあい
静岡うなぎ漁業協同組合

うなぎのほかにも、あゆや真珠^{しん じゆ}の養殖^{けん きゆう}の研究も行いました。冷蔵設備^{れい そう せつ び}の整備^{せい び}や、実験場^{じっ けん じょう}もつくり、吉田町の養鰻業^{よう まん ぎょう}が発展^{はっ てん}するように最後まで努力^{さい ご}を続けました。^{どりよく}

その後、うなぎの養殖だけではなく、加工^{か こう}にも仕事^{し ごと}を広げ、「吉田」といえば「うなぎ」と答えられるほど名前^{なまえ}が知れ渡^{わた}りました。恭のこうせきをたたえて、久保田家のとなりに記念碑^{きねん び}が建てられています。



久保田恭の記念碑



久保田恭さんは、^{ち いき}地域の発展をずっと考えていたんだね。

^{むかし}昔と今、うなぎの養殖はどう変わったのかな。



昔の養鰻業の様子



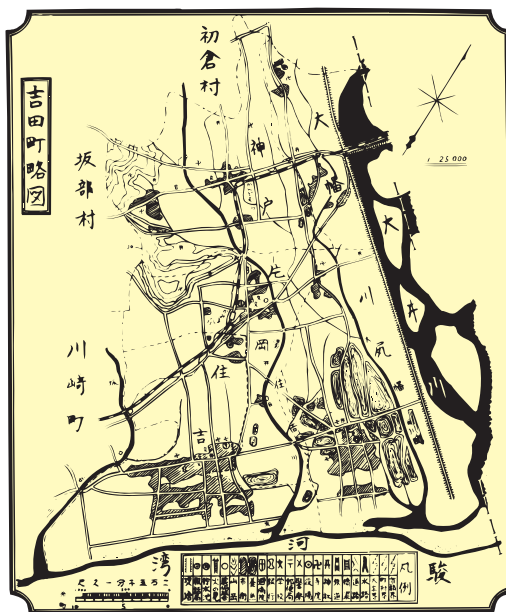
今の養鰻業の様子



2 鉄道と富士山静岡空港

(1) 鉄道が通って いたころの吉田町

おじいさんが、昔の吉田町の地図を見せてくれました。「地図の中の—は鉄道だよ。」と、教えてくださいました。そこで、おじいさんに、鉄道が通っていたころの吉田町の様子について聞いてみました。



とうそうてつどう じょうき きかんしゃ
藤相鉄道の蒸気機関車



しょうわ えんしゅうかん ども
昭和43年ごろの遠州神戸駅



あと げんざい
遠州神戸駅の跡 (現在)

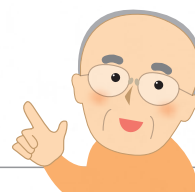
昔、鉄道がなかったころの吉田町はみそや豆など、ふだん使う物
で必要な買い物は相良(牧之原市)に行きました。

遠くは、掛川まで行く人もいました。

「車引き」という、荷車を引く仕事もありました。

今からおよそ100年前に、鉄道ができて藤枝に行くのは便利に
なったけど、小さい鉄道だったので、大きな荷物(はこ)は、運べませんでしたよ。

鉄道は歩くよりも速(はや)いくらのスピードでした。
台風で風が強いときは飛(と)んでしまうかなとさえ思
いました。



おおいがわ
大井川をわたるディーゼル車 (昭和42年12月)

ひらたくにひこしきつらい
(平田邦彦氏撮影)



かみよしだ
上吉田駅 (昭和34年)



あと げんざい
上吉田駅の跡 (現在)

(2) 富士山静岡空港

吉田町から見て西にある富士山静岡空港が、平成21年6月4日に開港しました。富士山静岡空港ができたことで、吉田町の人たちのくらしはどう変化したでしょうか。

旅行に
行くのが
便利に
なったね。

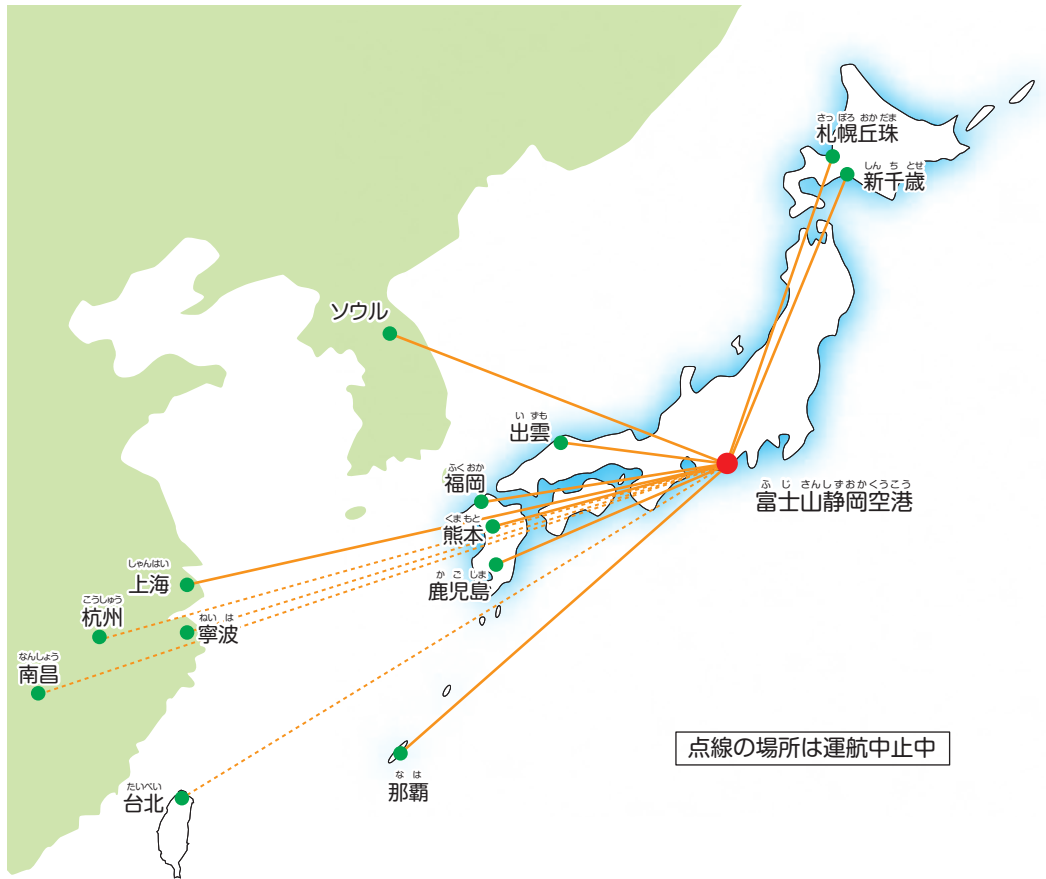


観光客がたくさん来るように、工夫しているね。



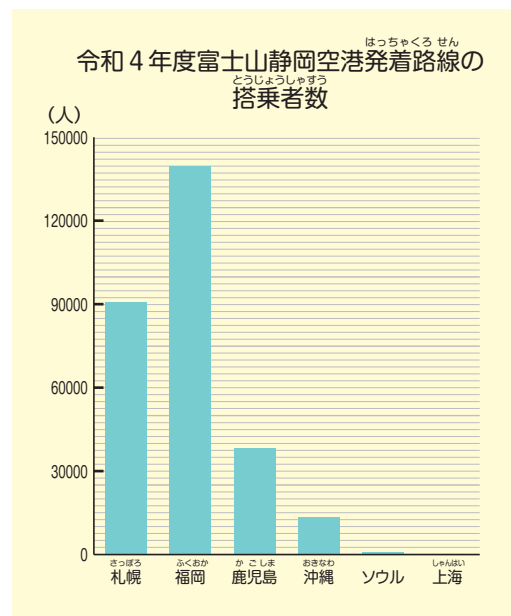
富士山静岡空港ができるまでは、静岡県の人々が国内または海外に飛行機で行く場合、羽田空港（東京都）・成田空港（千葉県）・中部国際空港（愛知県）を利用していました。

げんざい びん れいわ
現在行き来のある便（令和6年3月）



これらの空港まで行くのには、2～4時間ほどかかるため、目的地に着くまでの時間が短くなりました。

また、富士山静岡空港を利用して、国内や海外から多くの観光客がおとずれています。



3 町の発展につくした人々

(1) 大水とのたたかい

大井川は水が出ると、堤をやぶってはらんし、地域の人は、大きな被害を受けました。人々は、そのたびに、砂利をとりのぞいたり、あぜを直したりして、田畑を元にもどし、これにひるむことなく、様々な工夫と努力を重ねてきました。命を守るために力を合わせてくらししてきました。

(2) 洪水をふせぐ工夫

① 舟形屋敷

自分たちの家を守るために、家の周りに舟の形をした小さな堤防をきずきました。

舟が水を切って進むように、洪水の時は水のいきおいを弱めることができ、家が流されることをふせぎました。



片岡(久保田さん)舟形屋敷

② 川除延命地蔵

大幡の小高い所に、川除延命地蔵がおまつりしてあります。



川除延命地蔵

そのほか「輪中」といって、近所の人たちが力を合わせて高い土手をつくって命を守る工夫もしてきました。

③ 供養塔と道標

これは、江戸時代の「道標」です。
お墓の形をしています。

昔から、水難事故が多いので、道標
をかねた供養塔をたててお守りしてき
たそうです。



川尻の辻
供養塔と道標

④ 丸太橋を石橋にかえる

龍光寺の住職「鈴木養邦」は丸太橋を全て石橋にかけ
かえ、じょうぶな橋にしました。
また、洪水のために家が水びた
しになった人たちに、お米や生活
用品を寄付して、村人のためにつ
くしました。



石橋に使っていた石

(3) 水のめぐみをうけて 発展する吉田町

大井川の堤防にそって水を使
う大きな工場がたくさんならん
でいます。

今では、水のめぐみをうけて
豊かな吉田町として発展してい
ます。

豊かな水は、今の
産業につながって
いるんだね。



水を利用する工場

〈参照：郷土の発展に尽くした人々 私たちの大井川〉